

地域福祉文学大賞

部門賞（災害ボランティアセンター部門）

未知の世界に向かって

新港 公寿

令和5年度に全国公募した「地域福祉文学大賞」の受賞作品です。  
作品の著作権は、社会福祉法人新潟市社会福祉協議会にあります。

新潟市西区社会福祉協議会

あれから1年

10月も下旬となり、夜長に肌寒さも感じられる時期になってきた。

駅前通りでは、秋の歩行者天国が開催され、賑わいを見せている。

梶大輔は、久しぶりの休日、妻と保育園児の娘と息子、家族4人で歩行者天国を訪れた。多くの市民、みんなが笑顔だ。

この日は、「新潟県中越大地震」から1年目の日。まだ1年、もう早や1年、人それぞれの感じ方は異なる。新聞、テレビ各社も1年の節目の日とあつてか、被災地の復興の様子を映し出すため、取り戻した街の賑わいを報じている。

「お父さん、あつちにヨーヨー釣りがあつたよ、行こう」

「ああ、そうだな」

梶は自身の幼少時代を思い出し、娘の綾乃に引つ張られるまま、妻の亜希子と息子の元春と一緒にヨーヨー釣りの方に向かった。

震災から1年を経過し、見かけでは、市民誰もが幸せに満ちた表情をしている。しかし、梶は、未だに、1年前のテレビ映像、報道、地元新聞社の発行した記録集を見ることのためにためらいを感じている。

それは突然やってきた

2004年10月23日土曜日、あの日は秋晴れの天気であつたが、夕方には一変、気温も下がり、肌寒く感じられた。

「今日は、寒くなつたから、夕食には鍋にしようか。鍋に熱燗、最高だね」

梶は、1週間振りの家族との団らんにはときめいていた。妻と子どもたちと近くのスーパーで鍋の食材を買いに出かけ、夕方の5時に帰宅した。その後、今夜の夕食のお供である、日本酒を買いに行くため、一人で出かけた。

今日は久しぶりの晩酌なので、奮発して吟醸酒にしようか？いや、ちよつとだけグレードを上げて純米酒にしようか？こんな想像をしているひと時が一番楽しい。

迷つた末、純米酒の4合瓶を片手に持ち、会計を済ませた。

突然、ドーンという音とともに、身体が宙に飛んだ。

「何だ！これは」

まるで、トランポリンで弾んでいるような、下から突き上げる縦の激しい揺れ。これが直下型地震なのか。

売り物の瓶類は破損し、店内は身動きが取れない状態になっていた。

「すぐに家族のもとに急がねば」梶は急いで、車に飛び乗り、自宅へと向かった。

車で帰宅する道中、ブロック塀の倒壊、道路の陥没、液状化現象によるマンホールの隆起など、信じられない光景が飛び込んできた。更に、車の運転を続けていると、子どものころに体験した、船酔いと同じような気分が襲ってきた。

「余震か」

急いで車を路肩に止め、収まるのを待ち続けた。そして、再び出発。また余震、その連続。しかし、梶は、家族のことで頭がいっぱいで不思議に「怖い」という感覚にはならなかった。

数十分後自宅に到着。すでに周りは暗くなっており、普段であれば、家の中から明かりが灯る時間帯である。しかし、辺り一帯停電しており、寒空の中、近所の人たちは道路の隅で毛布に包まり、身を寄せ合っていた。

「お父さん、無事だったのね」妻が駆け寄ってきた。

「ああ、何とか無事に帰ってこられたよ。それより、子どもたちはどこだ」

「子どもたちは、お父さん、お母さんと一緒。実家にいるわ。それよりも、毛布や水、携帯ラジオが家にあるから、私、取りに行ってくる」

「おい、余震が頻繁に起こっているのに、今、家に入るのは危険だ」

「大丈夫、大丈夫」

妻は、梶が引き止めるのを振り払い、家へ物を取りに入った。

2〜3分後、妻が自宅から物を持って出てきた。その直後にまた余震が発生。ギリギリのところできなさを得た。

暗い空を見上げれば、ヘリコプターが3機、パタパタと轟音を立てて飛んでいた。梶はとっさに、「阪神・淡路大震災」の発生直後に、神戸の街が火の海になった光景を思い出した。

ここで、火の海になつては、この街はおしまいだと思った。が、幸いにも火の手は上がらなかった。

梶は、職場の人たちが気になり、携帯電話で連絡を取ろうとした。しかし、回線の許容範囲を超えたためか、誰にも通じない。右往左往しているうちに、どこからともなく、小学校の体育館が避難所として開設されたことが伝わってきた。

すぐさま、梶は、妻と子どもたち、そして妻の両親と共に、小学校の体育館へ向かった。

避難所にたどり着いた梶は、「職場が気になるから、見に行ってくる。子どもたちのことは頼んだぞ」

その一言を残し、職場へ向かう準備をしていたが、妻から意外な言葉が返ってきた。

「お父さん、今日だけはここにいて。お願い！」想像もつかない一言であった。

梶は、妻の不安な顔を見た途端、行きかけた足が止まってしまった。

結局、その晩は、家族と共に、避難所に身を寄せることになった。

しかし、午前3時ちょうどに、梶の携帯電話が鳴った。

「梶、お前のところに最初に電話が繋がったぞ。職場はとても使える状態ではないので、市役所の一室を借りた。俺は市役所にいるから、お前も今すぐ来い！」坂井事務局長からであった。

「俺に最初につながったとは！」

梶は妻に事情を話し、寒空の中、市役所へ向かった。

市役所に着くと、そこには大勢の市職員が集まり、情報収集に奔走していた。しかし、社会福祉協議会（社協）の職員は、坂井事務局長と梶の2人だけであった。

「坂井事務局長、他の職員は呼んでいるのですか？」

「いやー、真夜中だから、とりあえず、お前しか呼んでないよ」

非常事態なのに、自分しか呼ばれていないことを知った梶は、その場で坂井事務局長の了解の下、職員全員に、「本今朝定時までには職場に集合！」の連絡を入れた。全員に連絡を入れ終わるには、かなりの時間を要したことは言うまでもない。

翌朝、8時頃に、出勤できる職員で、職場の散乱した書庫の跡片付けを行った。その後、社協としての支援方策を考えなければならないが、主要なもの

は、何といっても、災害ボランティアセンター（災害ボラセン）の設置、運営であった。

近年、大規模災害が発生すると、被災地の社協が中心となり、災害ボラセンを設置、運営を行う形が一般化されている。当市においても、1年前に水害が発生した際に、社協が中心となって災害ボラセンの運営を行った経緯があった。

ちょうどその時、水害の災害ボラセンの運営で助言してもらった、県外のNPO法人の青山理事長が駆けつけてくれた。

「坂井事務局長、これだけの大規模災害になれば、災害ボラセンは必ず必要となります。一刻も早く、災害ボラセンを立ち上げましょう」青山理事長は、声を大にした。

早速、坂井事務局長は、市福祉部と調整を行い、結果、本日午後2時に市役所で災害ボラセン設置に向けた検討会議が行われることになった。

「坂井事務局長、大変ですね」

梶が一言お願いしたところ、間髪入れず、「バカ野郎、お前も一緒にこい」と強烈な言葉が返ってきた。

下っ端の自分が同席したところで、どうこうなる話ではないと思いつつ、梶はついていくことにした。

午後2時、市役所で検討会議が始まった。市側は、福祉部長、担当課長、課長補佐と錚々たる面々である。片や社協は、常務理事、事務局長と梶で臨んだ。また、NPO法人の青山理事長もオブザーバーとして加わった。

会議の結論として、まだ全体の動向はつかめていないが、これだけの規模の災害であれば、被災者から多くのニーズが寄せられると予測できたことから、早速明日に災害ボラセンを立ち上げることが決まった。

最後に、青山理事長が一言発した。

「それではみなさん、被災者の支援、ひいては市民のために、明日から災害ボラセンの活動に全力投球しましょう」「つきましては、災害ボラセンの運営は、ここにいる梶君が中心となって行いますので、みなさん、よろしくお願いしますね」

この一言で、一斉に皆の視線が梶に注がれた。

「おいおい、そんな話、聞いてないよ。勘弁してくれよ」と、梶は心の中でつぶやいた。

全く想像もつかない事態に対し、ただ戸惑うばかりではあった。しかし、この空気では後戻りできない。不安は確かに多いが、この瞬間、もう腹をくくる覚悟はできていた。

ともかくにも、災害ボラセンはスタートした。翌日から、本格稼働となり、災害ボラセンの本部は、梶の職場である、市の地域福祉センターに置いた。

梶の自宅も、停電が長引き、加えて、大きな余震が続いていたことから、震災発生後一週間、避難所での生活を余儀なくされた。とはいっても、梶は、早朝には災害ボラセンに出勤し、帰りは、皆が寝静まった夜中の10時、11時という生活が続いた。今から思えば、避難所は、ただ寝るだけに帰っていたようなものだが、一日の活動を終え、娘や息子の寝顔を見るだけでも、心は癒された。

避難所の生活では、様々なことを経験した。

ある日、夜中の12時近くに、一人の高齢の女性が、突然、奇声を発し、騒ぎ始めた。おそらく、認知症を患ったおばあさんが、避難所である小学校の体育館という普段と激変した環境からか、多動になったと推測できる。しかし、ここは避難所。しかも、夜中の12時近くという時間帯、「うるせええ、ばばあ、静かにしろ」「眠れねえじゃねえか、誰の家族だ」などの怒号が飛び交うのではないかと思われた。

梶は、すぐさま、「まづい」と思い、その場に立ち上がろうとした。すると、その瞬間、近くにいた複数のお父さんたちが立ち上がった。

「ばあちゃん、どうしたんね」

お父さん同士で、「ここだと人様に迷惑がかかる。校舎の脇に連れて行って落ち着かせよう」などと言い、おばあさんをなだめているではないか。

このお父さんたちは、普段から認知症に対する特別な教育を受けているとは到底思えなかった。この非常時だからこそ、地域住民自らが、できる範囲内のことをやろうとする普段では考えられない地域の力を感じた。

避難所生活も3、4日経った。朝目覚め、体育館の天井を見渡すが、元気が出ない。今日はボランティアの人たちは集まってくれるのか。こちらの予想に反して、少ない人数しか集まらないのではないか。毎朝、期待と不安の気持ちが入り混じる。

梶は、そんなモヤモヤした気持ちを吹き飛ばすかのようにふと思い出した。

「阪神・淡路大震災」の翌年、プロ野球のオリックスブルーウェーブのスローガン「がんばろうKOBÉ」がユニフォームに刻まれていたことを。

「これだ！」

その日から、ボランティアには、被災者に向けて、元気が出るスローガンを記した横断幕を作ってもらった。これは、被災者を思いやる気持ちをストレートに表した行動であった。

また、子どもたちの教育の場にもなった。毎朝、朝食にパンが配給され、避難者が列をなして取りに行く。梶の娘と息子は、手をつなぐかのように梶の人差し指をつかんで離さない。

「みんなが苦しい時だからこそ、わがママを言ってはだめだよ。他の人たちもきちんと待っているのだから。ちゃんとルールは守ろうね」

「うん、わかった」

娘と息子は、快く返事をした。不便ではあったが、きちんと順番を守ることの大切さを教えた。子どもたちにとっては、まさに実践的な教育の場であった。

震災から1週間後、梶の家でも、ようやく停電が解消され、避難所から自宅へ戻ることができた。気づけば、梶は1週間、風呂に入っていない。妻からは、「お父さん、ちょっと臭いよ。お風呂に入ったら」と言われる始末。

風呂に入るのも忘れていた1週間。自宅で久しぶりに風呂に入る喜びを感じた。

## 烏合の衆

「梶さん、とてもじゃないが、私では対応できません。電話、代わってもらえませんか。電話口で怒っていますので」

「おいおい、なんか穏やかじゃないな」

災害ボラセンも運営が軌道に乗りかけた5日目のことであった。

すぐに、梶は電話を代わった。

「俺は、阪神・淡路大震災のボランティアの経験者だが、俺たちが寄附した湯たんぽが使われず、避難所の隅に積まれていると、他のボランティアから聞いた。せっかくの善意で寄附したものが、これでは台無しだ」と、電話口で怒鳴ってきた。

「お気持ちにはよくわかります。しかし、まだ震災が発生して5日目。今はそこまで行く余裕はないので、今しばらくお待ちいただけませんかでしょうか」

梶は、冷静かつ丁寧に対応した。

すると、「阪神・淡路大震災の時は、被災者が薪の工面やお湯の確保を協力して行ってきたのに、どういうことだ」と、いわば、逆切れしてきた。

梶は、堰を切ったように、少々声を荒げ、ひるまず返答した。

「では、湯たんぽで使うお湯はどのように工面したのですか。今は断水が続いており、水の確保やお湯を沸かす薪などの燃料の工面はできません！阪神・淡路大震災では、被災者が自ら行ったということですが、それはいったい何日目の出来事だったのですか」

この言葉は、あまりにも正論だったためか、またドスの聞いた声だったのか、逆切れした相手も、いつの間にか黙ってしまった。

過去の被災地での経験は、正に財産である。しかし、それぞれの被災地には、都市基盤や地理、風習（ローカルルール）が異なる。つまり、全く同じ災害は存在せず、経験イコール絶対効果的なもの、正論とは言えない。自身の経験を引き合いに出し、押し付けようとするボランティアは、問題大有りだと梶は思わずにはいらなかった。

また、ある日のこと、梶が避難所へ帰宅した際に、義母から、昼間の避難所での出来事を聞いた。それは、避難者が近くのコンビニへおにぎりを買に行ったところ、名前の書かれた黄色のガムテープを貼った、2、3人の若者※が、おにぎりを買ったため、結局避難所の人たちは買えなかったとのことであった。

（※当時の災害ボラセンは、黄色いガムテープに氏名を記入し、それを左肩に貼ることで、名札としていた。）

「あいつらは、何なんだ。けしからん」

後に真相が分かり、昼間の避難所は、この話題で持ちきりとなり、避難者それぞれが、ボランティアに対する不信感を抱くこととなった。

おそらく、その若者たちが、災害ボランティアだと知ったら、被災者に袋叩きにされていただろう。

大規模災害には、被災者の役に立ちたい一心で全国各地からボランティアが駆け付ける。しかし、初心者から経験者まで幅広く、中には被災者の心情に配慮の姿勢が足りない人もいる。しかも被災地の地域性を知る人もほぼ皆無。そんな中で、梶は、烏合の衆と化したボランティアに対し、心を砕く日々を送っていた。

頼りなくて、ごめん

震災が発生して、3週間が経過した。本来ならば、ボランティアが家屋の跡片づけなどに活躍していると思われるのだが、支援ニーズは、災害ボラセン側が予想していたよりも出なかった。顧みるに、何かをきっかけに見ず知らずの人たちが大量に入ってきた経験がない土地柄からか、知らない人にモノを頼むのを躊躇してしまうのだろう。

ニーズがなかなか出ないことに対し、日に日に、訪れるボランティアからも県民性を否定する意見が続出してきた。挙句の果てには、災害ボラセンのスタッフだけではなく、被災地の地域住民に対し、「この地域の住民は、人にモノを頼まないのはおかしい！〇〇災害の時とは違う、やっつけられるか！」と、暴言を吐きまくる者も出てきた。当然、活動の閉そく感、ボランティア同士の雰囲気も悪くなってくる。

これらボランティアから数々寄せられる意見。社協職員に対する苦情などは構わないが、住民を傷つける言葉は、梶を苦悩させた。

一方、住民からのニーズが思ったより出ないことに対し、災害ボラセンとして、ニーズの把握がままならず、反省の念があったことも確かである。

「普段から顔の見える人が依頼すれば、被災者もニーズを寄せてくれるはずだ」

そこで、梶は民生委員や町内会長に、もう一度ニーズ調査を依頼するため、後輩の中村とともに、被災地に出向いた。

「梶さん、うまくいってくれればいいですね」中村のその言葉には期待が込められていた。梶と中村は、被災した地域に到着した。

住民が被災家屋の跡片付けや田畑の復旧作業を行っていた。そこには、地域の先導役である民生委員や町内会長が地域住民への気遣い・配慮に心がけ、更に自身の家庭の復旧にも努めていた。そんな姿を見て、梶はハツとし、躊躇してしまった。この人たちにこれ以上の負担はかけられない。

「中村、帰るぞ」

「梶さん、まだ民生委員や町内会長に何も依頼してないじゃないですか、本当にいいんですか」

「いいんだ」梶はうなずいた。

結局、梶は一言も言い出せないまま、被災地を後にした。

災害ボラセンの中核的な役割を担っているからこそ、この局面を打開しなければならぬのだが、結果として具体的な解決策も見いだせないまま、梶はある日の夕方、ミーティングで災害ボラセンのスタッフの皆に頭を下げた。

「本来ならば、今後の活動方針について、明確に指示を出すところ、俺の能力がないばかりに、みんなに迷惑をかけてしまい申し訳ない」

一瞬、凍り付いたような雰囲気になった。

長い期間、先の展開が読めない事態に対し、梶はもろろんのこと、ここにいる災害ボラセンのスタッフは自分たちの無力さに涙した。

しかし、間をおいてから、スタッフとして活動を行っている一人のボランティアが言った。

「梶さん、俺らは、梶さんが日々悩み、苦悩している姿を見るたびに、逆に俺たちが何とかしようと思っただけでここまでやってこられた。だから、……だからそんなことは言わないでください」

梶は、てっきり、頼りにならない自分は情けないと思い、謝ったが、結果的に、皆が梶を支えるために、これをモチベーションの一つとして、災害ボラセンの運営を行っていたことを初めて知った。

予想しなかった言葉に対し、言い表せないくらいの感情がこみあげてきた。

そして、「梶さんを休ませよう。俺たちが頑張るから」

いつしか、この言葉が、災害ボラセン内の合言葉となっていた。

交渉者（このままでは、終わりたくない）

梶は、毎朝、自転車での通勤の途中、仮設住宅の建設予定地を通っている。

11月中旬、市から仮設住宅の概要が発表された。これにより、災害ボラセンとしても仮設住宅への引越し支援実施の有無を検討することになった。

仮設住宅の引越しに関しては、行政から被災者生活再建支援制度で、住居の転宅費（引越し費用）として支援の対象経費が出ること。加えて、災害ボラセンは、引越しの際のボランティアコーディネートノウハウがないこと。更には、災害ボラセンの運営が長期にわたり、スタッフの疲労の色も濃くなっていることもあり、ここまで行わなくても良いという考えがあった。

坂井事務局長も、同様の考えから、今後、ボランティア活動のニーズの状態がこのまま続けば、災害ボラセンを閉鎖することになると考えていた。

しかし、梶の考えは違った。仮設住宅の引越し支援活動という手段を通じて、被災者の他のニーズの把握ができること。また、継続した被災者支援を行うことにより、仮設住宅入居者との関係づくりもできること。更に、ボランティアやNPO団体、他県の社協職員など、災害ボラセンを通じ初めて出会った見ず知らずの人たちが、一つの目標に向かい、皆が結束して仕事を進める姿こそが貴重な体験なのではないかと思っただけであった。

身体的にも精神的にも疲労が極限に達しているはずなのに、まだ災害ボラセンでやり残したことがある、このメンバーであれば乗り越えられる、もうちょっとこの仲間と一緒に活動したいという気持ちが湧き出てきた。

しかし、上司である坂井事務局長は引越しボランティアをせずに、災害ボラセン閉鎖の方向で考えている。その指示に梶が背いてしまうことは、後の社協業務に関しても亀裂が生じてしまう。

そこで梶は、何としても引越しボランティア活動を行うため、方策を考えた。梶が坂井事務局長に正面切って異を唱えれば、差障りがあるが、ここは梶の意見に賛同してくれる仲間の力を借りようと考えた。

早速、災害ボラセンのスタッフに相談した。メンバーは、市議会議員の斎藤を筆頭に、障害者団体のNPO法人代表の井川、個人ボランティアで長期に関わっている吉岡、地域づくり系NPO法人メンバーの若林の4人である。

「事務局長を説得する資料は俺が責任をもつて作る。説明は斎藤さん、取り巻きには、井川さん、吉岡さん、若林さん、頼む」

梶は切実に訴えた。

すると、集まったメンバーが言った。

「梶さん、水臭いな。俺たちも梶さんの考えに大賛成だよ。ここで引っ越しボランティアを行わなければ、災害ボラセンの意味がない。事務局長から何としても、ゴーサインを出させて見せるさ」

皆の心強い言葉に、梶は心の中で泣いた。

いよいよ坂井事務局長との交渉の日、梶は隣の部屋で待機していた。斎藤が仮設住宅への引っ越し支援活動は必要不可欠であると訴えた。しかし、坂井事務局長は断固としてノー。災害ボラセン閉鎖であった。

どんなに説明をしても、坂井事務局長の考えは変わらなかったが、話し合いの最後に井川が言葉を発した。

「坂井事務局長が何と言おうと、たとえ災害ボラセンがこのまま閉鎖になっても、俺は個人としても引っ越し支援を行う」

結局、話し合いは平行線のまま閉じた。

話し合いが終了し、災害ボラセンの仲間も、半ばあきらめかけていた。

しかし、その2日後の終礼ミーティングで、坂井事務局長から今後の方針の話が出された。

「引っ越し支援は、災害ボラセンとして行うこととする！」

「引っ越し支援が終了すれば、一度に大量の人数によるボランティア活動は終息する。そのため、引っ越し支援が終わりしだい、現在の災害ボラセンの活動は終了する」

あまりの急展開に、皆啞然として言葉を失った。

思えば、井川の最後の言葉が、坂井事務局長の心を動かしたと思われる。

とにもかくにも、明日からは、引っ越しボランティアの企画を行わなければならない。終礼ミーティングが終わった後、寒空の中、若林はたばこを一服しながら、つぶやいた。

「梶さん、引っ越しボランティアはもうだめかと思ひ、気持ちが悪く落ち込んでいたところ急展開でしたね。気持ちをもとに戻すのは時間がかかるが、しっかりやらんばだめですよね」

一筋の光が見えてきた

「吉岡さん、引っ越しボランティアの企画を行うため、明日にでも長期にボランティアで協力してくれる人の中から、生きの良いメンバーを5人ほど引っ張ってきてくれないか」

梶は、吉岡に頼んだ。

「はい、わかりました」

吉岡は大きな声で応えた。すると翌日、本当に5人を引っ張ってきた。

「この5人に引っ越しボランティアの企画をお願いしました。こちらにいる2人は現役自衛隊員で、職務ではなく、ボランティアとして一週間ほどいられるとのこと。こちらにいる方は、東京の私立の高校で講師をされているそうです。その左側にいる方は、以前引っ越し専門の会社に勤めていました。そして最後の1人は、地方で一般の会社で勤めておられる方です」

この短い時間の中で、様々な経験を持つ人たちを、よく引っ張って来てくれたなど、梶は吉岡の人を見る目に、ただ感心していた。

引っ越しの企画チームの第1回目の打ち合わせが、夜の8時から行われることとなった。この日の夜、梶は、被災した地区の支援会議に出席したため、その会議終了後の10時30分頃から参加した。

打ち合わせ会議に途中から参加した梶は、まずは会議の手法に驚いた。

この会議は、現役自衛官が主体となって進めていたが、A2版に拡大した仮設住宅内の平面図を床に広げ、5人が意見を交わしていた。

「自衛隊の基地見学ツアーでは、この位置とこの位置に係員を配属して」「この仮設住宅に通じる通路は狭いから、時間により一方通行にして、この位置には標識を立てておこう」

「何という緻密な計画なのだろう。まさにテレビで見た、戦時中の軍法会議の様子さながらであった。」

3日後、いよいよ仮設住宅への引っ越し支援が始まった。ここでは、ボランティアへのオリエンテーション役を高校の講師が担ったが、その説明は目を見張るものであった。

「みなさんは、被災者の手助けを行うために、ここに来ていると思います。しかし、ボランティアは被災者の支援のみではなく、被災者が復興に立ち向かい、前向きな姿を見るたびに、逆に私たちが被災者から元気をもらっているように感じます。ボランティア活動は、一方的な活動ではなく、お互いに支え、支えられているのです」

話を聞くうちに、心の底からやる気が出てくる話ぶりには驚いた。

引っ越し業者経験者は、引っ越しの申し込み受付の役を担った。すると、被災者からの相談に応じているうちに、感覚でボランティアの人数や必要な車両の台数をすぐにつかめているではないか。

このように、さまざまな能力を持つ者同士が手を組めば、想像もつかない発想が生まれてくることを梶は改めて知った。

実のなる木

仮設住宅の引っ越しボランティア終了まで、あと数日となった。

しかし、梶自身、なぜか心は晴れない。理由はわからないが、日に日に、朝を迎えるのが怖くなってきた。感情のコントロールができない。

職場の窓から遠くに見える山々を眺めていると、なぜか涙がこぼれた。どうすることもできなかつた。

バーンアウト（燃え尽き症候群）に注意するよう、数日前に市役所の広報から流されていたが、ひよっとしたら、この俺が。スポーツマンで馴らし、体力には自信があり、心身共に健康を自負していたこの俺が。最悪の事態が頭をよぎった。

もう限界だ！そう思った瞬間、梶は、坂井事務局長のもとへ。「しばらく休ませてください！」その一言を残し、逃げるようにその場を去った。

家に帰ったのだが、時間だけがいたずらに過ぎていく。悪い方へと考えてしまふ。ふと、自死まで。

病院へ行かなければと梶は思った。その時、約10年前に仕事の関係でお世

話になった医師を思い出した。その医師は心療内科クリニックを開院している。勇気を振り絞って行ってみよう。そう思った。

梶は、恐る恐る出向いた。もちろん、心療内科は初めての体験。待合室で待っている、梶の前に診察を受けていた若い女性が突然、泣きながら診察室から飛び出して行った。

その光景を目の当たりにし、梶は、とんでもないところに来てしまったと思った。

いよいよ、梶の順番になり、診察室へ入った。災害ボラセンの中核を担う役割として、これまで約2か月間、休みなくがむしやらになって活動してきたこと。全国からの支援者が押し寄せる中で、神経をすり減らしたこと。仮設住宅の入居期日の見通しは立ったのだが、その後、この街は、どうなってしまうのだろうか、全てとっていいほど、医師に打ち明けた。

医師は、相槌を打ちながら、話を聞いてくれた。

話が終わったあと、医師はおもむろに口を開いた。

「梶さん、ここに紙と鉛筆があります。紙に『実のなる木』を書いてください」  
梶は、とっさに林檎の木を思い浮かべ、ゆっくりと、林檎の木と林檎を書いた。

すると医師が一言。「やっぱりなー」「これは林檎だね」

「梶さん、林檎は木から取らないでいると、いずれは地面に落ちて沈んでしまうよね。これは今のあなたの心をそのまま映し出しているよ。林檎と同じように、あなたの心も地面に落ちている。震災支援もここまですれば、あなたがいなくても、世の中は動くよ」

「なるようになる。だから、思い切って休みなさい！」

梶は、診察を終え、帰宅した。その後、すぐさま布団に入り、眠りについた。1日目、2日目、3日目、何も考えず、ただひたすら眠った。

4日目の朝、体調はまだ完全ではなかったが、これ以上休むと皆に迷惑をかけてしまうと考え災害ボラセンへ向かった。そこには、いつもと変わらぬ光景があった。梶は、申し訳ない気持ちでいっぱいになり、伏し目がちに入室した。その瞬間、梶の姿を見た災害ボラセンのスタッフから、意外な言葉が聞こえてきた。「梶さん、よく休んでくれましたね」

我に返り、気づけば、周りから労いの拍手が送られていた。

梶は、うれしかった。しばらく災害ボランティアを空けていたのに。

未知の世界へ新たな局面に向かって

引越し支援も無事終了し、災害ボランティア活動も区切りがついたため、梶が復帰した日の翌日に、ささやかではあるが、「災害ボランティアありがとう会」が行われた。

そこで、全くのサプライズでボランティアの皆から、梶に対し、花束が贈呈された。

「梶さん、ありがとう。これまで、つらいことばかりだったが、梶さんがいたから俺たちもやってこられた」

「でも、梶さんには、『休め休め』と言っておきながら、梶さんがいなかった3日間、すげー不安だった」

災害ボランティアのスタッフたちは、梶に、笑いながら話しかけてくる。

この時、梶は、改めて「俺は一人じゃない」と悟った。

あれから1年が経過した。梶は、今現在においても、震災と十分に向き合えない自分がいる。おそらく、この心境はしばらく続くのだろう。

とあるボランティアが言っていた。「俺たちは嫌になれば、帰ることはできるが、梶さんはそうはいかないからつらい立場だね」

被災地社協として責任が重くのしかかる言葉である。

しかし、裏を返せば、他の人には決してできない貴重な体験と言える。

今後も続く復興、地域づくりに向け、これからも様々な壁にあたるだろう。

それは、容易に想像できる。しかし、その壁を乗り越えなければ、この街の未来はない。

梶は、今「未知の世界」という新たな局面に向かっていった。少しずつ前に進めよう。梶には、その心構えができつつあった。